

まことと会便り

2022/11

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

秋季永代経法要のご法話の中で、桑門先生がご法事を参観日と例えてお話になりました。法事は参観日です。

参観日というと皆さんは観に行く方だと思われるかもしれませんが。亡くなった方が良くないところに堕ちていて追善供養しないといけないと思われるならそうなるかもしれません。

しかしながら、阿弥陀如来のおはたらきのおかげですでお浄土へ参られている方々へ、そんなものは必要ありません。では何故ご法事があるのでしょう。それは参観日だからです。観られるのは私たちのほうです。

亡くなった方からご縁をいただいた私たちが集まって、〇年の年月が経って今はこうなっております、と仏前に集って観ていただく大切な機会なのです。いただいたご縁が広がります。うまくいっている時もありましょうし、そうでない時ももちろんあります。それを良い悪いと判断して隠したいと思うのは私たち人間の心です。仏さまにそんなものは関係ありません。良いも悪いもそのままに、胸をあけて頭を下げる機会といただきます。

行事予定

十二月 二日

ヨガの会



令和五年

一月 十三日

光圓寺 御正忌法要

午後一時半より

(注) 例年と日にちが変更になりました

一月 二十日

ヨガの会

★お知らせ

コロナウイルス感染拡大防止のため、まこと会新年会はこの度も中止とさせていただきます。

二月 十八日(土) 午後一時半より 広島別院

広陵西組

親鸞聖人御誕生八百五十年
立教開宗八百年 慶讃法要

帰敬式も実施されます

詳しくは光圓寺までご連絡ください

【秋季永代経法座・報恩講

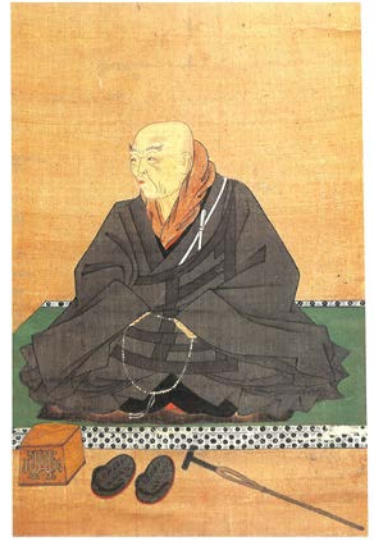
―坊守覚書―】

*おおらかに のびやかに生きる

親鸞聖人の姿

親鸞聖人の御影(肖像画)というと「熊皮御影」が有名です。お寺のお内陣に掛けられていることが多いので皆さんも一度は目にされたことがあると思います。黒い袈裟に白い帽子(もうす)と呼ばれる頭巾を首巻のように召されていて、太く大きな眉が描かれています。全体的にモノトーンで描かれており、がっしりとした骨太なお姿で、幾多の苦難を乗り越えて生きぬかれたご生涯と重なる印象を受けます。

もうひとつ「安城御影」という肖像画があります。西本願寺からもめったに外に出さないものなので知名度は低いものですが、こちらには国宝であり親鸞聖人自らが絵師の目前に座られて描かれたといひ聖人のありのままのお姿に近いと言われていいます。袈裟の下に檜皮色の小袖を着て、茶色かかった赤紫の帽子を首巻のように召され、座の前に桑火桶や



【国宝】安城御影副本

親鸞聖人83歳の姿を描いたとされる。正本はもちろん国宝であるが、蓮如上人が模写を指示した副本も国宝。これに対し、熊皮御影は重要文化財。2023年3月2日～5月21日の間、京都国立博物館において西本願寺より出展される。

鹿杖、猫の皮をひいた草履など親鸞聖人がお使いになっていたと思われる品々が置かれています。「熊皮御影」に比べると色が明るくカラフルです。お顔も太い眉や骨ばった感じはなく、口笛を吹くように口先を細めてひょうひょうとした印象です。

親鸞聖人という私たちには様々な苦難に耐え忍び、道を究める真面目さや強さのお姿ばかりを求めますが、実際の聖人は様々な苦難に遭いながらもおおらかにのびやかに生きておられたのかも知れません。

当時の仏教では悟りの道を究めるために様々な戒律や修行の道が説かれており、欲を捨て清貧の生活を求めるのが僧侶の生活でした。しかし、親鸞聖人はそのような表面的なイメージにこだわることなく、ありのままの自分のお姿を描かされました。そこには、ありのままの姿をさらけ出しているも阿弥陀如来は必ず私を救ってくださいから大丈夫という確信があります。何か立派な行いをしていなければならぬといった、人間が考えそうな条件のようなものは何もない。その安心と信頼が「安城御影」から感じることができます。和歌詠みの会で賜った檜皮色の小袖をここでわざわざ着用されたのも、浮ついた交わりを食った時代がこの親鸞にもあった、というこ

とを包み隠さず表現されたかったのです。

春の永代経法座でもお話されました「十王経」の思想が、長い年月をかけて日本の各地に間違った死後の世界を広める役割をしてしまいました。三途の川や地獄など、もともと仏教の教えには無いものが仏教の教えの一つのように誤解されています。悪いことをすれば地獄に墮ちるといえば納得するのは私たちの浅はかさです。私たちは善なることのみで生きることができません。他の生き物の命をいただき、嘘もつき、他人を羨んだりもしてしまいます。私が今まで生きてきた中の、善も悪も全てが今の自分を作っている一部なのです。

それをすべてひっくり返して掬い取ってやろうとおっしゃるのが阿弥陀如来です。その大きな救いのはたらきに包まれて日日を送ることの有難さに気づき、感謝の日々を歩んでいきたいものです。親鸞聖人がそうであられたように。

